



Part 3

「入試」は
どう変わった？

社会の変化に応じて大学入試も 多種多様に選択できる時代

社会での働き方、高校の学びが大きく変化するとともに、大学での学びや、大学に入るための入試も保護者の時代とは大きく変わっています。今年からいよいよ新課程での入試が始まりましたが、どう変わリ、なぜ変わったのか、大学など高等教育機関の情報誌の編集長を務める小林浩さんに教えてもらいました。



リクルート進学総研所長
「カレッジマネジメント」
編集長
小林 浩さん

1964年生まれ。株式会社リクルート入社後、グループ統括業務を担当。「ケイコとマナブ」企画業務等を担当。経済同友会に出身し、教育政策提言の策定に関わる。その後、経営企画室、会長秘書、特別顧問政策秘書などを経て2007年より現職。文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会委員等、さまざまな委員を歴任。現在は、中央教育審議会大学分科会高等教育の在り方検討特別部会委員を務める(2023年～)。

保護者の時代とどう違う？

国語以外でも長文読解力や 論理的な思考力が必要

大学受験の中核を担う、毎年1月に行われていた「大学入試センター試験」(以下、センター試験)。これが2021年度から「大学入学共通テスト」(以下、共通テスト)に変わりました。名称が変更されただけでなく、知識があれば解答できる問題が減り、国語以外の教科でも多数の資料や長文を読み込んで、論理的な思考力がないと解答できない問題が増えるなど、問題の質も大きく変わっています。こうした変化は共通テストに限らず、大学個別の選抜試験にも見られる傾向です。また、英語の4技能(読む、聞く、

書く、話す)を測るために、実用英語技能検定やTOEFL、IBT®テストなどの民間試験結果を活用する大学も珍しくなくなってきました。入試が変わってきた理由について、「学力観の変化」にあると小林さんは言います。

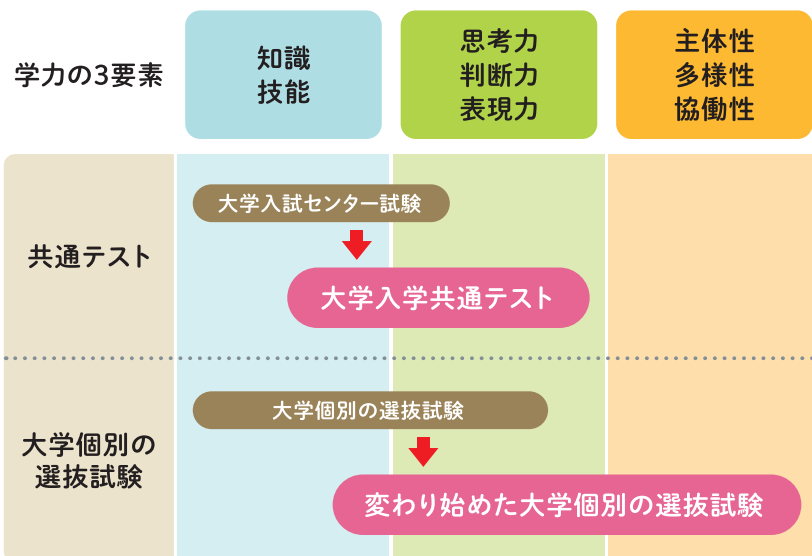
「保護者の方々が高校生だった時代は、学力＝知識・技能でした。試験問題のみで測れる力で、いわゆる偏差値という軸で大学も序列化されていました。しかし、社会や働き方が大きく変化している予測不能な現代では、既存の知識・技能だけではもう対応することができない。そこで、文部科学省では学力を多角的な視点で捉え『学力の3要素』に整理したのです」「学力の3要素とは「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・

多様性・協働性」のこと。今までの知識・技能が大切なことはもちろん、自ら課題を発見し、解決に向けて探究し、その成果を発表できる力や、主体性をもって多様な人々と多様な場面で協働する力を教育で身につけようということです。

知識・技能だけでなく 学力の3要素を測る入試に

Part 2でご紹介したように、高校では2022年度からカリキュラムが変わり、新課程では「総合的な探究の時間」が必修科目となったことが、学力の3要素を総合的に育てる取組の一例です。現在の学習指導要領で育成すべき資質・能力の3つの柱(12ページ図1)の基となっているのが学力の3要素なのです。

図1 保護者の時代と今の、入学者選抜における「学力の3要素」の評価ポイントの変化



保護者の時代 今の時代

「共通テストなど大学の入試が変わることは入試改革とよくいわれますが、世の中の変化に合わせ、高校の授業も大学も変わらなくてはならない。当然、高校から大学への入口である入試も変える必要性から、高大接続改革という大きな教育改革の一環ということ。入学志望者の学力の3要素を大学が測るために入試が変わってきているので、保護者の時代のように机に向かって勉強するだけの学力では対応できなくなっているのです」(小林さん)

学力の3要素と入試の対応を表したのが図1です。当初は共通テストに記述式の解答を導入することも検討されていましたが、現状はセンター試験同様に全問マークシート方式ではあるものの、前述のように論理的な思考力が求められる問題が数多く出題されています。一方で、大学個別の選抜試験では記述式問題や小論文が増加傾向にあり、「思考力・判断力・表現力」だけでなく、「主体性・多様性・協働性」を測るグループディスカッションなどを入試に取り入れている大学も出てきました。

**入試方法の多様化で
挑戦の機会が増えている**

2022年度からの新課程に対

応した入学者選抜が今年からスタートしました。1月に実施された共通テストでは、「情報」が加わり、科目の再編もあり、従来の「6教科・30科目」から「7教科・21科目」に。各大学の入試にも変化がありました。

「それに先駆けて、先進的な入学者選抜を早くから始めていた大学も少なくありません。全体的な流れとしては、保護者の時代は一般入試やセンター試験が主流だったことに対し、総合型選抜に力を入れている大学が増えているのが特徴です」(小林さん)

総合型選抜とは以前のAO入試が改定された入試区分。大学個別の入試方法も図2のように見直され、保護者の時代とは名称も選抜方法も変わっているのです。いずれの入試でも学力の3要素をしっかりと評価しようとしています。特に総合型選抜は東北大学や京都大学などの超難関国立大学での導入が目玉され、全体としても増加傾向にあります。

「大学ごとに求める人物像が非常に多様化しています。昔のように大学と生徒が偏差値だけで対応しているのではなく、総合型選抜では高校時代の探究での活動内容を評価するなど、生徒のさまざまな強みを評価できます。また、

日頃からコツコツと学べる子どもは学校推薦型選抜が向いているなど、子どものタイプによって大学との接続機会が多様になっている。保護者には複雑に感じるかもしれませんが、偏差値だけで考えると選択肢に入らなかった大学・学部でも、子どもの個性や学びたいことと実はマッチしているなど、大学との出会いの機会が増えていると捉えられると思います」(小林さん)

実際に、文部科学省の調査(※1)では総合型選抜は2024年度に私立で93・4%、国立で79・3%と大半の大学が実施。入学者の割合では、学校推薦型選抜と合わせると私立では59・3%と6割近く、一般選抜が主流と思われるが国立でも18・5%と2割近くが一般選抜以外の方法で入学し、さらに増加傾向にあるのです(図3)。

なぜ入試は変わった?

**社会で求められる力を
大学で測り、育てるため**

なぜ入試や高校、大学の学びが変わったのでしょうか。生成型AIの出現など、保護者の皆さんも日常で社会の変化のスピードを体感していると思いますが、今の教育改革は2030年の社会で求められる力をどう育むかの検討から始まっています。

図2 大学入学者選抜の入試区分の変化

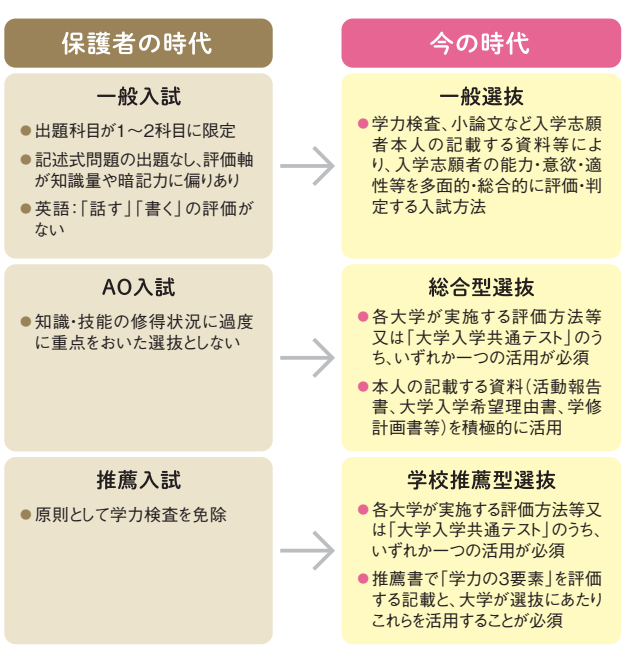
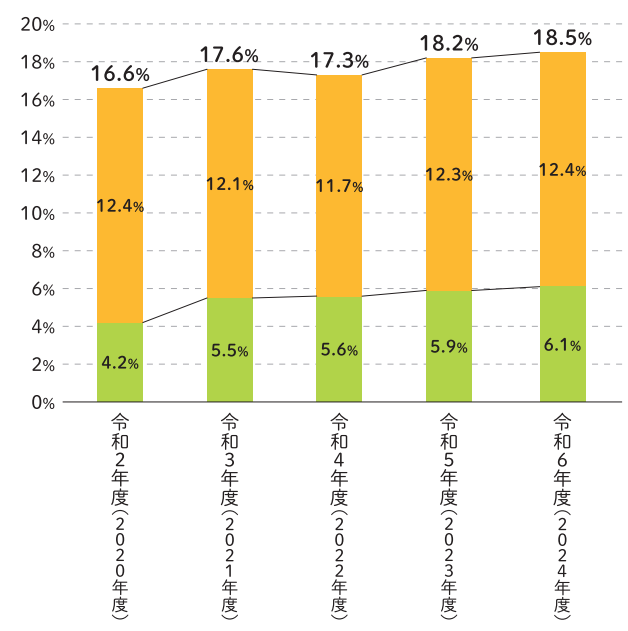


図3 国立大学の総合型選抜+学校推薦型選抜の入学者数



※1 文部科学省「国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」(令和3年度版、令和6年度版)から編集部にて集計



「2030年がどんな時代かは予測不能です。テストで測れる力はすべてAIに代替されるともいわれています。では、学生が社会に出るときに企業の採用担当者が何を重視しているかという土地頭（じあたたま）の良さ々なのです」（小林さん）

大企業でもいつ淘汰されるかわからないのが今の時代。答えが一つではない難問に直面したときに、自分の頭でどう考えられるかが試されることとなります。自ら課題を見つけて論理的に判断したり、それを人とコミュニケーションして解決策を見出したりしていけるかという地頭の良さは、偏差値など旧来のものさしでは測れないものです。社会のニーズに対応できなければ、難関大学卒業者でも即戦力で活躍できないという危機感を大学がもち始め、より実社会に即したカリキュラムや協働的な学び方に変わってきています。

「先の見えない時代で企業も大学も危機感をもって取り組んでいます。高大接続改革とは、社会に出たその先までを見据えた改革なのです。入試も学校も変わっていくなかで、保護者の皆さんもわが子の学びに対する考え方をアップデートしていく必要があるのではないのでしょうか」（小林さん）

特色ある入学者選抜方式の例

東京都市大学

探究学習イベントへの参加で興味・関心から学部選びができる

大学が提示する課題テーマから高校生が興味あるものを選択し、大学の教員や学生のサポートの享受、図書館の利用などの環境で自由探究を進める探究ゼミナール「OPEN MISSION」を実施。成果発表会まで進むと発行される修了証明書が、総合型選抜（2段階選抜）の提出資料として利用できるだけでなく、一般選抜の生徒の入学後のミスマッチを防ぐことができ、学部・学科名からではなく、自分の興味・関心から学科を選ぶ進路選択に結びついている。

早稲田大学

社会に貢献できる能力・素養の基礎が入学前に培われていることを評価する

数学やデータ科学は、大学における授業はもちろん、社会に出た後、必要不可欠になる学問だと考え重視。このため、政治経済学部では2021年度から一般選抜において共通テストの「数学I・A」を必須科目とした。また、受験生がこれまで取り組んできた地域での活動や経験、問題意識等を踏まえ、大学で主体的に学び、その成果を地域に還元する意欲を評価する、「地域探究・貢献入試」（総合型選抜）を複数の学部が2018年から実施している。

島根大学

国立でも共通テストを必須とせず好奇心や探究心を評価する

島根大学では2021年度から「へるん入試」という独自の総合型選抜を実施。読解・表現力の筆記試験は課すが共通テストは課さず、同学が「学びのタネ」と名づけた好奇心・探究心を測る。生徒の学びたいことと同学で学べることのミスマッチを防ぐために出願前に面談を実施（参加は出願要件ではない）。高校時代の取組や、自身の「学びのタネ」を記載した出願書類を基に、面接を重視している。2025年度の募集人員は全入学定員の30%以上を占めている。

小林さんから
保護者の
皆さんへ

「勉めて強い」学びではなく、 子どもが内発的動機で学びたい学びを

第1にお伝えしたいのは、大学入学がゴールではないということ。教育改革は「2030年の社会と子どもたちの未来」をテーマに検討されてきました。大学も変わってきていますし、保護者の皆さんが知っているいわゆる偏差値が高いとされてきた大学以外でも、これからの時代に必要な力をつけるための質の高いカリキュラムを実施している学校はたくさんあります。子どもたちの将来を見据えて、学びたいことが学べる大学選びをサポートしましょう。

そして、皆さんたちの時代の常識でお子さまにアドバイスしないように。各大学

で選抜の機会が多様になっているので、前ページで挙げた入試区分以外にも、学校推薦型選抜の中には保護者の時代の指定校推薦にあたる指定校制のほか公募制もあります。一般選抜は、昔は前期と後期だけでしたが、今は中期もあります。一つの大学だけでも多様な入口を設けているのです。保護者の思い込みで薦めるのではなく、子ども自身が自分に合った大学と入試方法を、自分で調べるよう促してあげてください。

最後に、机に向かって時間だけが勉強ではないということ。自分で課題を

見つけられるようになるために、どこかで特別な体験をしに行く必要はありません。蚊に刺されやすい妹を可哀想に思い蚊の研究を行い、海外の大学に留学した少年もいます。身近なことに課題を見つけて、それについて家族で対話することで、学びの好奇心が育っていくこともあります。「勉強しろ」と保護者が子どもに言う時代は終わりました。「勉めて強い」学びではなく、内発的に自分から学びたいことを見つけられるような学びにつながる可能性を含む会話が、家庭内でできるといいですね。